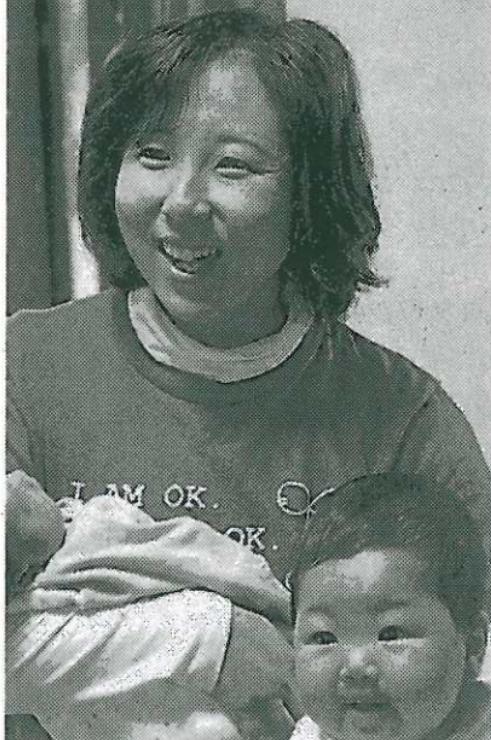


「私、虐待しています」告白して家族再生

子どもへの虐待が止まらない。なぜ、わが子を傷つけてしまったのか。母親も苦しんでいた。立ち直るきっかけになつたのは、受け止めてくれる人の存在だった。(机美鈴)

NPO運営支援者に



大阪のベッドタウン、大阪府富田林市。古い2階建て民家から子どものはしゃぐ声が聞こえてくる。1階居間では母親が子育て談議に花を咲かせる。市内の岡本聰子さん(37)が2003年、仲間とつくつNPO法人ふらうどースペース金剛の「ほつとひろば」。週6日、4、5人のスタッフが常駐し、育児相談に乗る。

11年前の春、岡本さんは「ほつとひろば」で利用者の赤ちゃんの世話をする岡本聰子さん(大坂府富田林市寺池台1丁目、机写す)

夫の転勤で大阪から東京に引っ越しした。長女は4歳、次女は5ヶ月。次女はアトピーがひどく、体中をかきむしってぐずるのを一日中あやした。母乳に影響するため、食生活では卵・牛乳・大豆・小麦を抜き、30台までやせ細った。

最初は長女に向かった。ちよつとしたことで足や尻をいたいた。「お母ちゃんは鬼になつた」。長女はそう言つて、おねしょや夜泣きを繰り返すように。慣れない土地で相談相手はない。夫に「会社という逃げ場があつてええなあ」と食つてかかつた。

その年の7月下旬、マンション8階のベランダから外を眺めた。富士山がきれいで立上りた。「飛び降りたら薬になれる」。両脇に2人の子を抱えたが、それ以上力が入らない。 「なんて母親なんや」。

「水の怖さをわかるために浴槽に沈めた」「たばこは危険だと教えるために火を押しつけた」。そう話す母親は否定せず、「しんどいねんな」と耳を傾け、不適切な行為に自ら気づかせる。悩む親にかつての自分を重ねる。

「苦しんだけど、その経験が私の血や肉になつていて」「煮詰まつてしまつ前に、SOSを発信する勇気を持つて。そして、周りの人は非難せずに受け止めてあげてほしい」

01年に大阪に戻り、通信教育で社会福祉士の資格を取つて「あらうとスペース金剛」を立ち上げた。法人の運営するひろばは4カ所に増え、1日40組以上の親子が訪れる。